

樹木に宿る力と人の思いを形に 木造の価値を見直し循環型社会へ

空条 円
Madoka Kujo

大きな樹木には人間の寿命をはるかに超えた長い年月にわたり、その地に根を張って立ち続けてきたものも少なくない。そうした樹木を日本人は古来、畏敬の念をもって大切にしてきた。出雲大社の本殿の中心を支える巨大な心御柱や、諏訪大社で七年に一度行われる御柱祭など、民族宗教や神事と巨木のかかわりも深い。

樹木は日本人にとって身近でありながらも、祈りの対象でもあった。「樹」を伐り出し、大地から切り離された「木」に彫られた仏像や神像の多くは全国各地の寺社仏閣などにまつられている。彫刻作品とし

ての技法も多彩であり、それぞれの樹木の特性を的確に捉えて振るわれた槌や鑿は時に緻密に、時に大胆に自由自在に扱われる。

江戸時代前期に日本各地を修行し、木肌と鑿痕を生かした神仏像を数多く残した円空。日本を代表する仏師の一人であり、木の生命力を感じさせ、素朴で優しい円空の仏（円空仏）は地域の人たちに親しまれ、今も多くの人の心を惹き付ける。今年二〇二三年三月に東京都中央区の三井記念美術館で開かれた特別展「魂を込めた 円空仏―飛騨・千光寺を中心にして―」も話題を集めた。荒々しくも温かみのある木彫像

は、眺めていると自然と心が穏やかになる。特別展では人気マンガで認知度が高まった「両面宿儺坐像」が見どころの一つ。その姿は憤怒のなかにも慈悲がにじみ出ており、円空仏の真骨頂を示す。

山林修行僧の円空は庶民救済を目的に愛知、岐阜を中心に関東、北陸から北海道までを巡り、一二万体の仏像を刻もうと誓願を立てた。三十歳頃から彫り始めたという円空仏は当初、古典的な造りで丁寧に彫られていたが、次第に簡素な仏像へと変化していった。

現存する円空仏の数は約五、〇〇〇体とも言われる。円空は材となる

と受け継がれている。

万博建築で3R積極発信

二〇二五年国際博覧会（大阪・関西万博）が四月十三日に開幕した。万博会場のシンボルであり、「多様でありながら、ひとつ」という会場デザインの理念を表した「大屋根リング」が目玉の一つ。建設に当たっては関係者らが知恵を絞り、日本の伝統的な技法に先端技術を取り入れた工法を採用。一周約二キロ、建築面積約六万平方メートル、高さ最大二〇メートルの規模を誇り、世界最大の木造建築物に認定された。

大屋根リングだけでなく、今回のパビリオン建築では自然素材が多量に用いられ、これまで以上にぬくもりが感じられるのも大きな特徴だ。建築物の多くが Reduce（リデュース）、Reuse（リユース）、Recycle（リサイクル）といった「3R」を強く意識した造りとなっており、万博開催後には施設の一部が世界各地で使われ続けることになる。

樹木に神仏を観想し、「樹神」の姿を求めて彫刻した。樹木を削ること自体に仏教儀礼の意味を持たせ、削り跡をそのまま残している。訪れた土地の山林の木を素材に用い、あまり手数を掛けない作風は、たくさん彫ることで多くの人々を救おうとした円空の願いの表れでもある。

円空仏の寺でクラファン

岐阜県高山市にある袈裟山の山中に位置する千光寺は、約一六〇〇年前の仁徳天皇時代に、乗鞍山麓に住んでいた飛騨の豪族・両面

宿儺が古代信仰の祈りの場所として開山したと伝えられる。約一二〇〇年前に真如法親王（弘法大師の十大弟子の一人）が仏教寺院として建立した古刹であり、高野山真言宗に属する密教寺院で山岳仏教の修行の古風を今に伝える。最近では「円空仏の寺」としても広く知られる。

海拔約九〇メートルの山中に広がる寺の境内には、大慈門の近くに「円空仏寺宝館」がある。館内には両面宿儺坐像をはじめとした六四体の円空仏と寺宝の一部を展示している。本堂や庫裏などがある境内中心地を囲むように、山中に整備された八八カ所の遍路道（一周約三キロ）には、樹齢一二〇〇年を超える五本杉（国指定天然記念物）など信仰の場所が点在し、山全体が信仰の対象となっている。

円空仏のほか、江戸時代中期に活躍した絵師・三熊思孝（花顛）による「桜の襖絵」も千光寺を代表する寺宝の一つだ。両面宿儺坐像と同じく県指定有形文化財であり、これまでに何度か修復が施されてきた。豪

雪地帯で寒暖差の大きい山寺にあるため、色落ちや顔料の剥落、紙の劣化が激しく、さらに建物（庫裏）の劣化も加わり、襖の建具や回廊の傷みが年々拡大していった。こうした状況を踏まえ、千光寺では襖絵の補修を行って劣化を止めた後、温度変化の影響が少ない寺宝館へ移すとともに、当時の色彩を再現した複製を制作することにした。傷みが激しい庫裏の修繕や寺宝館の改修を含めた事業費の一部を賄うため、クラウドファンディング（第一目標金額五〇〇万円）を実施。一月下旬からの二カ月間で目標金額を達成し、直接の支援申し出や展示会場での募金などをあわせて七九〇万円を超える支援が集まった。

飛騨の国 袈裟のお山の 絶えずして きてみん人は 万代までに。円空が詠んだ和歌には、「飛騨国袈裟山の千光寺に行ってみようという人は時代を経ても絶えることがない」との思いが込められる。千光寺の歴史と文化財を未来へつなぐ思いは、今も絶えることなく脈々と

会場デザインプロデューサーを務める建築家の藤本壮介氏は、大屋根リングを機に木造建築の採用が一段と広がることを期待する。持続可能な社会を構築していくうえで、森林が担う役割の大きさを強調。木は生育段階で二酸化炭素を吸収し、伐採後は建材などに活用でき、さらに植樹し育てるといった自然循環は環境に優しく、循環型社会の創出には欠かせない資源と位置付ける。

世界最古の木造建築物の五重塔がある法隆寺も、コロナ禍で施設の修繕や管理にかかる費用を工面するのが難しくなった際、クラウドファンディングを実施して大きな反響を呼んだ。二〇二二年六月に始めた支援募集の初日に目標総額の二、〇〇〇万円を達成し、募集期間の約一カ月半で当初目標の七倍を超える支援が集まった。

木造の文化財などを未来へつなぐのは、いつの世でも今を生きる人たちの大きな責務だろう。脱炭素化社会を実現するためにも「木造」を巡る取組みは一段と重要となろう。